

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18249

研究課題名（和文）現代形而上学の時間論との対照におけるインド仏教哲学の刹那滅論の研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study of the Theory of Momentariness in the Indian Buddhist Philosophy with the Time Theories of the Contemporary Metaphysics

研究代表者

酒井 真道 (Sakai, Masamichi)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：40709135

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インド仏教哲学における主要な時間理論である「刹那滅論」を、現代形而上学の議論の枠組み内で提示することを目指し、更には、それを、現代形而上学の時間論の一理論である「ステージ・セオリー（stage theory）」と、その周辺理論との対照において位置付けた。中世インド仏教の時間論を現代形而上学の中で蘇らせることにより、本研究は新たな比較哲学の地平を切り開くことが出来た。「ステージ・セオリー」と「刹那滅論」の共通点と相違点、そしてそれらを生み出した背景を明らかにしたことが本研究の中心的な成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の我が国のインド仏教研究は、文献学に軸足を置き、主としてその成果を、インド思想、仏教思想という、比較的閉じた枠組みの中で提示するという仕方を探っていた。一方、本研究は、中世期のインド仏教思想における有力な時間論である刹那滅論を、現代哲学の最前線に位置する現代形而上学が構築した議論の枠組みの中で提示し、更には、現代形而上学の諸理論との対照の中でその特徴を論じることに取り組んだ。本研究が採用した比較思想の方法論は、本研究が或る程度まで着実な研究成果を挙げたことから、今後のインド仏教思想研究の領域に、新たな切り口や視座を与えられたものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to present the theory of momentariness, which itself forms the central time theory of Indian Buddhism, in the argumentative framework established by the contemporary metaphysics and to position it in contrast to the stage theory, a time theory of the contemporary metaphysics, and other related theories. By making the time theory of medieval Indian Buddhist philosophy alive in the framework built by the contemporary metaphysics, this research could open a new door in the comparative philosophy. The main achievement of this research consists in revealing the theoretical commonalities and differences between the Buddhist theory of momentariness and the stage theory and from where those commonalities and differences derive.

研究分野：印度哲学・仏教学、比較思想学

キーワード：刹那滅論 stage theory 瞬間 分割可能 分割不可能 ダルマキールティ ダルモッタラ プラジ ユニャーカラグプタ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

インド仏教論理学・認識論を専門研究領域とする研究代表者は、これまで長期間、インド中世期の仏教思想の中心的な時間論である刹那滅論 諸行無常の教理を背景とする理論で、あらゆる存在物は瞬間的にのみ存在するとする理論 の解明に取り組んできた。とりわけ、インド哲学史上で最大の仏教思想家とも言えるダルマキールティ(7世紀頃)と、彼の系譜に連なる思想家たち、例えば、ダルモッタラやブラジュニャーカラグプタ(いずれも9世紀後半ごろ)らが主張し、更には証明することに取り組んだ刹那滅論を明らかにすることに取り組んできた。

一方、現代哲学の最前線に位置する現代形而上学、すなわち分析哲学以降に展開した形而上学の領域においては、ステージ・セオリー(stage theory)と呼ばれる時間論 バナナやテニスボールといった通常の対象は瞬間的なステージ(stage)としてのみ存在するという理論 がセオドア・サイダーやキャサリン・ホーリーなどによって1990年代後半より2000年代にかけて大々的に主張されるようになった。

時間と存在に対する形而上学的な考察は、哲学研究の一大トピックであるが、洋の東西と時代を大きく隔てて展開した、非常に似通ったこの二つの説を対照しつつ研究することは、時間をめぐる哲学研究の領域に新たな視点や問題意識を提供することが期待される。この目論見と期待のもと、本研究は開始された。

2. 研究の目的

上述のように、本研究は、インド中世期の仏教思想の中心的な時間論である刹那滅論を、現代形而上学が打ち立てた時間理論のひとつである、ステージ・セオリーとの対照において考察し、時間をめぐる哲学に新たな視点や問題意識を提供することを目的とした。その際に、研究者代表者が注力したのは、現代形而上学が構築した議論の枠組みの中に刹那滅論を投げ入れて位置づけ、それを現代形而上学の視点から解釈することであった。これは、刹那滅論をインド思想や仏教思想という特定のコンテキストから解放することに他ならない。刹那滅論の理論的特徴はそれを生み出した特定のコンテキストにあると考えるならば、この脱コンテキスト化は大きなリスクを孕むものであるが、実りある対照研究の為に、一方が一方の土俵内に入って相撲を取ることが必要不可欠である。それゆえに、このような方針から本研究は遂行された。

3. 研究の方法

仏教の刹那滅論の内容解明については、研究代表者のこれまでの研究活動の中で十分な蓄積があったことから、本研究の初期段階では、サイダーやホーリー、デイヴィッド・ルイスらをはじめとする、現代形而上学者たちの諸理論を考察することに主に取り組んだ。すなわち、ステージ・セオリーはあくまでも、現代形而上学が打ち立てた時間論における一学説に過ぎず、それが生み出されるに至った経緯や、それに対抗するライバル理論、すなわち、パーデュランティズム(perdurantism)やエンデュランティズム(endurantism)、プレゼンティズム(presentism)などの考察、更にはそれらと比較した際の、ステージ・セオリーの長所と短所の理解を進めた。

その結果、ステージ・セオリーを含めた、現代形而上学の時間論の諸学説も、仏教の刹那滅論も、共通する、或る形而上学的問題に向き合う中で構築されていることが明確になってきた。その問題とは、「変化と同一性をめぐる問題」である。

「変化」というものは、変化する主体の数的な同一性(numerical identity)を一方では要求し、同時に、他方では、変化する主体の性質上の相違(qualitative difference)を要求する。しかし、「ライブニッツの法則」(Leibniz's law / Discernibility of Identicals)によれば、「同一性」とは、数的に一つであるだけでなく、それがもつ性質もまた全同であることを意味する。すなわち、ライブニッツの法則を認める以上、ものの変化というものは認められないことになる。現代形而上学における、時間と存在をめぐる諸学説は、この「ライブニッツの法則」を厳守しつつも、同一対象の、時間の流れにおける変化は如何にして説明可能か、という形而上学的な問題に回答するために生み出されたものである。他方、中世インドの仏教においてもまた、既にヴァスバンドゥ(4世紀頃)の著作『俱舍論』で明確にされているように、同一対象に矛盾する、或いは、両立不可な二つ以上の属性が帰属すること、つまり同一対象が質的に変わる、変化することはできない、という旨が主張されている。すなわち、質的に違うということは、もの自体が異なっていることを意味するとヴァスバンドゥらは考えていた。

この事実から、本研究においては、「変化と同一性をめぐる問題」を対照研究の軸に設定し、その問題に諸議論を収斂させる形で、刹那滅論とステージ・セオリーの比較研究を進めるという方法をとった。すなわち、本研究が採った方法は、「変化と同一性」をめぐる問題へのレスポンスという観点から、ダルマキールティとその後継者たちの議論については、彼らの著作原典(サ

ンスクリット語テキストやそのチベット語訳テキストとして現存する)を丹念に読み解き、同じく、現代形而上学の学匠たちの著作についてもまた、その内容を詳細に検討し、双方を対照させるという方法である。

4. 研究成果

研究成果として明らかになったのは、以下の3点である。

(1)「変化と同一性をめぐる問題」に対して、刹那滅論が採る立場とステージ・セオリーが採る立場は全く同じである。双方ともに、同一の対象が、時間の流れの中で、矛盾する、或いは、両立不可な諸属性をもつということをも全く拒絶するがために、諸対象は瞬間的にのみ存在するという立場を採る。この点において双方は全く同じである。

(2)他方で、瞬間/ステージに分量を認めるか否か、すなわち、瞬間は分割可能か否かという点で双方は異なる。刹那滅論では、瞬間に分量を認めない立場が明確に主張される一方、ステージ・セオリーの主張者のひとりであるホーリーはステージの分量の問題に対して曖昧な立場を表明するけれども、ホーリーの議論を丁寧に追えば、ステージ・セオリーでは、瞬間に分量を認める立場が必然的に帰結される。この場合、仏教の立場では、瞬間の移り変わり(transition)は、瞬間が自発的に消滅することで説明されるが、ステージ・セオリーの場合は、瞬間の移り変わりは他律的なメカニズムとなる。すなわち、刹那滅論の立場では、現象世界は、対象自体の自発的な発生と自発的な消滅というダイナミックな動きとして捉えられ、ステージ・セオリーでは、現象世界は静的なものとして理解される。換言すれば、すべてのステージは予め所与のものとして、理解されている。

(3)(2)で述べた相違点は、双方の理論の出発点が全く逆であることから理解可能である。すなわち、仏教の刹那滅論は、諸行無常という、諸事物が壊れる、消滅するというネガティブなアспектから展開した理論であるが、ステージ・セオリーは、同一対象の「変化」が以下に説明できるか、すなわち、対象の、時間の中での、持続を説明するために構築された理論である。つまり、双方は全く逆のベクトルをもっているのである。換言すれば、刹那滅論では、ものの消滅に力点が置かれるがゆえに、瞬間の移り変わりは自発的な発生と消滅とにより説明され、ステージ・セオリーでは、ものの持続が前提であるから、すべてのステージは予め所与とされているのである。

にもかかわらず、結果的に双方が全く同じ結論に行きついているという事実は、時間をめぐる比較哲学を行う上で、極めて興味深いと言える。これは、同一の対象が時間の流れの中で矛盾する、或いは、両立不可な諸属性をもつという事態の不合理性が以下に強固なものであるかということを示唆していると言えるだろう。

本研究の最終の2年間では、仏教の刹那滅論に焦点を絞り、知覚と時間の関係について考察した。ダルマキールティの註釈者のひとりであるプラジュニャーカラグプタによれば、我々の知覚は瞬間的にのみ機能し、瞬間的に働く知覚によって把捉される対象は瞬間的に他ならない。彼の理論によれば、知覚は知覚対象の無を把握できないから、知覚に生じる対象像(イメージ)は瞬間的に他ならない。この議論は、現代哲学における、知覚と知覚対象の関係性、そして、知覚と時間認識の関係の問題を考察するにあたって非常に興味深い視点を提供するものと思われる。しかし、プラジュニャーカラグプタの視点から見た、現代形而上学の理論についての考究にまで研究を推し進めることはかなわなかった。

本研究全体を総括すれば、「中世インド仏教の時間論である刹那滅論を、現代形而上学のステージ・セオリーとの対照において考察し、時間をめぐる哲学に新たな視点や問題意識を提供する」という、当初の目的は概ね達成できたと思われる。和文として発表した論文「瞬間(刹那)と可分性・不可分性 現代形而上学の stage theory と仏教の刹那滅説」『比較思想研究』46(2020): 144-152(第33回比較思想学会研究奨励賞受賞論文)では、ダルマキールティらと現代形而上学者との対話が実現したとするならば、彼らの間では如何なる議論が期待されるか、という問いについて論じ、将来的な比較哲学の見通しを述べることができた。

刹那滅論において説明される、或いは、刹那滅論において説明可能な因果関係のモデルと現代形而上学が提示する因果関係のモデルの比較や、諸対象の内在的本質(intrinsic nature)を如何に理解し、定義するか、或いは、我々認識主体の時間認識をめぐる、知覚と知覚対象の関係など、本研究からは、インド仏教思想と現代形而上学とをスコープとする比較哲学における新たな課題が次々と見つかった。残念ながら、本研究においてそれらに取り組むことは出来なかったが、比較哲学における将来的な課題が多く見つけられたことも、本研究のひとつの成果として挙げられるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 酒井真道	4. 巻 2
2. 論文標題 ブラジュニャーカラグプタによる刹那滅の証明 Pramanavarttikalankara ad PV IV 283-285和訳研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ブラジュニャーカラグプタ研究』	6. 最初と最後の頁 265-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50869/prajnakaragupta.2.0_265	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 酒井 真道	4. 巻 1
2. 論文標題 ブラジュニャーカラグプタによる滅無因の証明 Pramanavarttikalankara ad PV IV 280-282和訳研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブラジュニャーカラグプタ研究	6. 最初と最後の頁 293～323
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50869/prajnakaragupta.1.0_293	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 酒井真道	4. 巻 46
2. 論文標題 瞬間（刹那）と可分性・不可分性 現代形而上学のstage theoryと仏教の刹那滅説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『比較思想研究』	6. 最初と最後の頁 144-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakai Masamichi	4. 巻 46-1
2. 論文標題 On Dharmakirti's Notion of Contingency/Dependence, with a Special Focus on vinasa	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Indian Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10781-018-9348-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakai Masamichi	4. 巻 1
2. 論文標題 On the Time-Gap Problem in the Buddhist Theory of Momentariness: Two Candidate Solutions and Their Psycho-epistemological Analysis	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『小田淑子先生退職記念論文集』	6. 最初と最後の頁 149-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakai Masamichi	4. 巻 71巻3号
2. 論文標題 Independence and Certainty: Prajnakaragupta's Argument on the Rising and the Setting of the Sun	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『印度學佛教學研究』	6. 最初と最後の頁 102-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Masamichi Sakai
2. 発表標題 "Prajnakaragupta on Perception and Momentariness"
3. 学会等名 The Sixth International Dharmakirti Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井 真道
2. 発表標題 「無依存性と確実性 太陽の没と出をめぐるプラジュニャーカラグプタの議論」
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 SAKAI, Masamichi
2. 発表標題 Bhaviveka, and (Three?) Other Commentators on MMK 19.1 with Some Philological Observations
3. 学会等名 "Reading Dharmapala and Bhaviveka" Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 酒井真道
2. 発表標題 瞬間(刹那)と可分性・不可分性 現代形而上学のstage theoryと仏教の刹那滅説
3. 学会等名 比較思想学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKAI, Masamichi
2. 発表標題 Combining Research Perspectives: Philology and Intercultural Studies
3. 学会等名 Philology and Philosophy in South Asian, Tibetan and Buddhist Studies: Celebrating 60 Years of Austrian-Japanese Collaboration (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masamichi Sakai
2. 発表標題 Non-Persistence in Time: A Buddhist Account of Intrinsic Nature
3. 学会等名 International Workshop "God and Time II: Philosophical and Theological Perspectives on Time" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 酒井真道
2. 発表標題 「vinasaとは何か? ダルマキールティにおける「有」の解釈と「無」の解釈」
3. 学会等名 第69回日本印度学仏教学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sakai Masamichi
2. 発表標題 Dharmakirti's Concept of Contingency/Dependence With a Special Focus on vinasa
3. 学会等名 Buddhist Philosophy Workshop "Chance and Contingency" (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sakai Masamichi
2. 発表標題 On the Time-Gap Problem in the Buddhist Theory of Momentariness: Two Models of Solution and Their Psycho-epistemological Analysis
3. 学会等名 XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Marcus Schmuecker, Michael T. Williams and Florian Fischer (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 228
3. 書名 Temporality and Eternity: Nine Perspectives on God and Time	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------